
ゼロのアルバート

スペンサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロのアルバート

【Nコード】

N5733G

【作者名】

スペンサー

【あらすじ】

バイオハザード5のアルバート・ウェスカーをゼロ魔のルイズが召喚しました。

ゼロのアルバート プロローグ (ゼロの使い魔 クロスオーバー)

私は望んでいたのかも知れない。

宿敵とも言えるあの男の手により倒されることを。

だがただでは死でやることはできん。

「クリイーーーーーッス!!!」

ウロボロスを伸ばし掴んだヘリコプターを左右に激しく揺さぶる。

さあお前はどうかやって切り抜ける？

暫く揺さぶっているとヘリからRPGの弾頭が2つ飛んで来るのが見える。

避けることは出来ない。

どうやら私はこれで終わるようだ……

目を閉じようとすると目の前に鏡らしきものが浮かんでいる。

私は無意識に空いている方の手を伸ばしていた。

その手が鏡に触れたとたん目の前が真っ白に染まっていった。ゼロの使い魔 クロスオーバー ゼロのアルバート プロローグ

イントリスティン魔法学院

< sideルイズ >

今日はトリステイン魔法学院の春の使い魔召喚の儀式。

私、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは嬉しさ半分：いや、嬉しさは一分で後は落胆が占めている。

相次ぐ爆発の末にやっとの事で召喚。

でも出て来たのは人間。

それも平民の。

まあ、貴族を呼び出していたらもっと大変なことになってたと思う。

そんなどうでもいいこと考えていても私の目の前に広がる光景は変わらず広がっている。

「ゼロのルイズが平民を召喚したぞ！」

ああ…、また周りの人は私を馬鹿にする…

< side ウエスカー >

今まで真っ白だった視界があげると、そこにはピンクのブロンドの髪をした少女が目の前に立ってコチラを訝しそうに見ている。

その少女の先にはコスプレをした中年男性がいた。

……………今は触れないでおこう。

周りを見てみると少女と同じ格好をした沢山の少年少女がいた。

よく見るとみんな形は違えど杖のようなものを持っている。

何だこれは？

宗教の儀式の最中なのか？

そんなことを考えていたら周りが騒ぎ出す。

平民やら何やら言っていたが私にはもつと気になることがある。

自分の体が元に戻っているからだ。ウロボロスを大量に取り込み、

最早人の形をしていなくなった体が、服を含めてクリスと戦う前に戻っている。

それどころかあの時持っていなかった装備までもがある。

「一体どうなっているんだ？私は死んだのではないのか？」

自らの手を見ていたら、先程の少女が目の前まできている。

(あとがき)

自分の自己満の為に書いてみました。ゼロ魔の方は詳しくは知らないのですが、所々間違っていると思いますので、色々指摘していただきたいです。

追記

キャラの口調が違うかも知れませんが、その点は大目に見て読んでくれると有り難いです。
ウェスカーの口調が分からないので自作させて貰っています。

ゼロのアルバート 第一話

sideルイズ

コルベール先生にやり直しを申請したが駄目で、私は今この平民と契約をしないといけなくなってしまった。

「感謝してよね。こんな事絶対に平民はされないんだから。我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブランド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

「コントラクト・サーバントの呪文を唱え、いざ契約仕様とするとこの男の背が高く届かない。」

「ちよつとあんた屈んでよね」

男が屈んだのを見て額に杖を指し、逃げられないように素早く唇を合わせる。

唇を離し暫く経つと男の左手にルーンが刻まれる。

男は一瞬顔をしかめただけであまり気にした様子がない。

「ふむ。コントラクト・サーバントは一回で出来たようだね。ん？

これは珍しいルーンだ。」

コルベール先生は使い魔の男のルーンを写し終わると、周りの生徒に学院に帰るように指示を出していく。

それに従ってみんなフライカレビテーションをかけて学院に飛んでいく。

私を貶しながら飛んでいった者もいた。

ゼロのアルバート 第一話

sideウエスカー

私は今有り得ない光景を目の当たりした。
人が空を飛んだのだ。

ワイヤーなどを使わずに当たり前のように飛んでいく。

「あんた何なのよ！」

上に向けていた視線を下げると少女がコチヲを睨んでいる。

「何と言われてもな。こちらが聞きたいくらいだ。ここは何処なんだ？見たところヨーロッパのようだが。」

「ヨーロッパ？何処よそこ？そんな地名どこにも無いわよ。ここはね。トリステイン魔法学院よ。」

「トリステイン？魔法だと？ふん。寝言は寝て言え！」

「あ、あんたね！平民が貴族に対してそんな口を聞いていいと思ってるの！」

あの鏡のような物に触れた途端に目の前が真っ白になり、目が覚めたと思つたら自分の体は元に戻っていたり、魔法だという可笑しな力があつたりと正直頭が着いてこれていない。

ここが死後の世界だとしても、自らの左手に感じた焼けるような痛みがあつたため、一概に結論づける事は出来ない。

最も今の状況には情報が足りなさすぎる。そんな状態では正しい判断をする事は出来ないだろう。

まずは情報収集をする事が先決だな。

「ちよつとあんた！人の話を聞いているの！」

「おい、娘。お前に聞きたい事がある。」

「な、何よ。一体。」

「お前は私に何をした？」

「何ってただ使い魔召喚の儀式をしただけよ。なのに何で平民が出てくるのよ！」

「お前があつた鏡を出したのか？私の体に何をした？」

「鏡？何それ？それに私はあんたに何もしてないわよ。それよりもあんたの名前を教えなさいよ！」「礼儀がなっていない娘だ。人に名を聞くときはまずは自分からするものだ。」

「平民のくせに生意気ね！まあいいわ。私の名前はルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。それであるたは？」

「アルバート・ウエスカーと言うものだ。好きなように呼べ。それでルイズとやら、お前は学生か？学生なら学院の責任者と話をさせてもらいたい。案内しろ。」

情報を集めるにはそれなりの地位を持った者の方が適しているからな。

「あんたみたいな平民が何ご主人様に命令してるのよ！」
やけに偉そうな態度だ。

この娘には話をするだけ無駄だと理解した。

私は先程の集団が飛んでいった建物に向かうことにした。

後ろからはルイズがキャンキャンと喚いていたが無視をする事にする。学院までの道のりをルイズの騒ぎ声を聞きながら歩き、漸く学院の敷地内に入る事が出来た。

この時ばかりはバイクか車があつて欲しいと思うが、無いもの強請つてもしょうがない。

さて、学院までは来れたが何処に学院長の部屋があるか分からない状態だ。

大方あの城のような建物の最上階にいるだろうと予測をし、建物の中に入っていく。

娘も一緒に付いてきた。

流石に喚き疲れて大人しく人の後ろを歩いている。

最上階に着き一際豪華な扉をノックもせずに関け放つ。

娘も流石にその行為は許せないらしく、激しく抗議していたが、そんな事は全くも気にせずに中へと足を踏み出す。中へと入ると立派な白髭を携えた爺さんが、妙齢の女性に足蹴にされている。

ここはSMクラブなのか？

後ろの娘もこの光景には驚いているらしい。

「すまない、邪魔をした。」

取りあえずこの部屋から出ることにする。

「ま、待ちたまえ、君達。私に何か要件があるのではないのかね？」
私が振り返ると爺さんも女性も何事も無かったように、自らの席に座っている。

通常では考えられない速さだ。

ウロボロスでも取り入れてるのかと思っただが、ここには魔法というふざけた力がある。

それを使ったのだろうと気にせず、目の前の爺さんに返答をする事にした。

「あんたがここの最高責任者か？」「如何にも。儂がこの魔法学院の学院長、オールド・オスマンじゃ。」

爺さんは髭をさすりながら答える。

「あんたに聞きたいことがある？」

「まあ待て。先ずはお主が何者かを述べてくれんかのう。」

「これは失礼した。私はアルバート・ウェスカ！。好きなように呼んでくれて構わない。私は後ろにいるルイズという子に召喚されたらしい。」

爺さんは確認をとるために、後ろの娘に視線を移す。

「はい。確かにこの平民は私が召喚したものです。」

そう言いながら娘は私と並ぶように一歩前に出てくる。

「そうか。それでウェスカ！君だったな。君は儂に何を聞きたいのかね？」「先ず一つはここが何処だか知りたい。地球のどの当たり何だ？」

「はて、地球？…聞いた事も無いが、ここはハルケギニアのトリステイン王国にあるトリステイン魔法学院じゃが。」

地球ではないと？

「世界地図はあるか？あるなら見せてくれ。」

「少し待っておれ。」

オスマン氏が杖を振るうと棚にある紙の束が独りでに目の前の机に飛んできた。

どうやら魔法の方は本当らしいな。

「さあ、これがこの世界の地図じゃよ。」

「これは……」

そう言い見せてくれた地図は、普段見慣れた地図ではなく全く持って初めて見る物だった。

ここは本当に死後の世界なのかもしれないな。

「どうじゃね？これで満足かね？」「ああ、礼を言う。次に召喚について教えてもらいたい。召喚とは死んだ者を呼び出すものなのか？」

「何言ってるのよあんた！そんなわけ無いでしょ！！」

「うむ。ミス・ヴァリエールの言うたとおりじゃ。サモン・サーバントでは、ハルケギニアにおける生きた生物を呼び出すものじゃ。死んだ者を呼び出す事は出来ん。」

「一つ訂正だ。私はこのハルケギニアという世界の住人ではない。

よって、召喚は生きた生物を呼び出すものだな。」

「ちよつとあんた！！何言ってるのよ！そんな事信じれる分けないでしょ！！」

「私はお前に言っていない。オスマン老に言っているのだ。」

「あんたいい加減にしなさいよ！！」

「まあまあ、ミス・ヴァリエール。ここは抑えて下さい。」

今まで黙っていた女性がルイズを押さえてくれた。

ルイズの方は納得がいかないらしく、ブツブツと一人事を言っている。

「先程の続きだが、私はこの世界とは違う地球という所から来た。」

「異世界ということかのう？」

「そうだろうな。」

「何か証拠になる物はあるかのう？此方もそう簡単に信じる事は出来ないのでな。」

確かに自分が反対側の立場なら先ず信じないだろう。

私は自分の装備をしつかりと確認を試みる。

近接戦闘用にナイフが一本あり、銃器はサムライエッジとH&K P8が一丁ずつあり、背にはハイドラ、L・ホーク、ハンドキャノンとマグナムが装備されている。弾薬の方はハンドガンの弾が80発、シヨットガンは20発、マグナムは14発ある。

他には探知式爆弾が5つ、手榴弾が5つ、閃光弾が2つ、ハーブ（緑×赤）が3つ、救急スプレーが2つと申し分ない装備が揃っているが、この地ではたぶん補給が出来ないため、あまり多用は出来ないであろう。

ホルスターからH&K P8を取り出し弾数確認の為マガジンを抜き出し確認すると21発フルで入っている。

確認が済むとマガジンを入れスライドさせ初弾を装填する。

「何か壊していい物はあるか？」爺さんに聞くと一つの石を渡してきたので、窓を開けそれを爺さんに頼み窓の外に浮かべてもらう。

「Look well（よく見ている）」

そう言い、銃から延びているサイトを石に合わせ、引き金を引く。

乾いた破裂音が3回響き渡り、3発の銃弾が石を完全に砕く。

三者三様に驚いている。

「あんたどんな魔法を使ったのよ！」

娘が飛びかからん勢いでまくし立ててくる。

「魔法など使っていない。銃を撃っただけだ。」

「嘘よ！！銃なんて一発しか撃てないじゃない！それにそんなにちっちゃく無いわよ！」

「ふん。何時の時代の話をしてる。これには21発連続して撃つことができる。」

「なんと！！そんな物があるのかね！？」爺さんまで驚いているとは、……この世界の技術は相当遅れているようだ。

「ああ。これで信じてもらえたか？」

「うむ。そんな物は見たことがない。君の話信じようではないか。それで他に聞きたい事はあるのかね？」

「使い魔についてももう少し詳しく聞きたい。」

「よかるう。それが終わつたら今度はこちらの質問に答えてくれるかの？」

「give-and-takeだ。答えられる事なら答えよう。」
それからオスマン氏が教えてくれた事をまとめると、使い魔には三つの役割があり、一つ目は主人との感覚の共有。

二つ目は硫黄などの秘薬の探索。

この二つは私には出来ないため、特に気にすることはない。

三つ目は主人の護衛をする事らしい。これが最も重要らしく、私にとっては造作もないことだ。

後は一度呼び出した使い魔を送り帰すのは不可能らしく、使い魔契約は主人が使い魔のどちらかが死ななくては契約の破棄は出来ないらしい。私は一生この世界にいななくてはならなくなってしまうたよ
うだ。

「言っておくが、私は使い魔などしない。」

「なあ！！あ、あ、あんた平民で使い魔の分際にくせにいい加減に
しなさいよ！！」

「では聞こう。使い魔をして私にメリットがあるのか？仕えた分の
報酬などあるのか？」

「それがあんたの義務なの！衣食住のお金は私が払うのよ！！それ
に公爵家の令嬢である私の使い魔ができるんだから、それだけで光
栄なことなのよ！」

「笑わせるな。そんな事私一人でなんとでもなる。それに私は誰の
下にも付かない。覚えておけ。」

「ご主人様をこんなにも馬鹿にするなんて……………お、おおお仕置
きが必要ね！！」

そう言いながら娘が杖を向けて来たので、ウロボロスにより各段に
上がった身体能力で、娘のそばに一瞬にしてより杖を奪い取る。

三人とも呆けた顔をしている。

「ウェスカー君。私が君に給金を払うのでな、ミス・ヴァリエールの
使い魔をして貰えんかの？」

いち早く元に戻った爺さんから提案を受ける。

確かに悪い話では無いのかもしれない。

活動をするのにも何かと資金がかかる。それに私はまだこの世界については無知だ。

ある程度の資金と知識を得手から行動を起こしても遅くは無いだらう。

「……良いだろう。賃金の話はまた今度だ。この世界の物価は分からないからな。私の話は以上だ。そちらの聞きたい事は何だ？」
その後周りが暗くなるまで爺さんの質問に答え、今日の所はお開きとなった。

私は娘の部屋の近くにあった空き部屋を借りることにした。

その際娘が性懲りもなく喚きだしたが、その辺は割合させてもらう。

(あとがき)

第一話終わりました。何だかもう挫けてしまいそうになってしまいました。一先ずの目標としてフーケまでは書きたいと思います。

ウエスカーの装備ですがバイオ5のマーセの装備を参考にさせてもらいました。ゲームでは確実に持てない数の装備ですがその辺はご都合主義にて。

序盤はルイズに厳しくなると思います。その辺を考慮して読んで下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5733g/>

ゼロのアルバート

2010年10月12日04時56分発行